

国道354号線（境バイパス）地域内
埋蔵文化財発掘調査報告書

三ツ木越戸遺跡

1981年

財団
法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

資料	財 文 藏 埋 塚 馬 郡 群 謝	01-353
	股 國 業 專 查 新	125
No. 96-933	日 28 月 5 年 8 平 成	(7)

国道354号線（境バイパス）地域内
埋蔵文化財発掘調査報告書

三ツ木越戸遺跡

序

道路交通網の整備は現代社会の進歩発展からくる必然的な要請であり、県下各地でこうした目的の土木工事が多く計画または実施されています。

国道354号線は佐波郡境町付近で交通渋滞が甚しく、その解消策として境バイパスの建設が計画されました。この地域が埋蔵文化財の包蔵地があるところから、県土木部の委託を受けて発掘調査を実施いたしました。

地元の方々のご協力を得、所期の目的を達成することができました。ここにその調査結果をまとめ報告書といたします。

ご協力いただいた関係各位にお礼申し上げますと共に、この小冊子がいささかなりともお役に立てば幸いです。

昭和 56 年 3 月

群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 清 水 一 郎

例 言

1. 本書は昭和54年度及び55年度、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が群馬県土木部の委託を受けて実施した「国道354号（境バイパス）」計画路線内の佐波郡境町大字三ツ木に所在する埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査地籍は次の通りである。

佐波郡境町大字三ツ木字越戸114番地他
3. 調査は昭和55年3月17日～3月29日、5月12日～5月30日にわたり実施したが、調査は次の者が当たった。

調査担当者

第一次	関 晴彦（県埋文事業団）
	徳江秀夫（ " ）
第二次	細野雅男（ " ）
4. 本書の図面、本文とも細野雅男が作成した。
5. 本調査における出土遺物は一括して県埋蔵文化財調査センターで保管している。

目 次

I	発掘調査に至るまでの経過	1
II	発掘調査の経過	1
III	遺跡の地理的、歴史的環境	3
IV	三ツ木越戸遺跡の調査	5
	1. 第1次調査	5
	2. 第2次調査	7
	(1) 遺構	8
	(2) 遺物	11
V	ま と め	18
	1. 遺構と時期	18
	2. 三ツ木越戸遺跡と周辺の遺跡	20

挿 図 目 次

第1図	遺跡周辺の地形
第2図	トレンチ設定図
第3図	遺構配置図
第4図	第1号住居及び4号住居
第5図	2号住居実測図
第6図	2号住居カマド実測図
第7図	3号住居実測図
第8図	3号住居カマド実測図
第9図	1号住居出土遺物
第10図	2号住居出土遺物
第11図	3号住居出土遺物
第12図	4号住居出土遺物

図 版 目 次

図版1	遺跡全景、1号住居
図版2	2号住居、3号住居
図版3	4号住居、1号溝と2号土壇
図版4	3号住居遺物出土状況、4号住居遺物出土状況
図版5	1号住居遺物
図版6	2号住居遺物
図版7	3号住居遺物
図版8	4号住居遺物

I 発掘調査に至る経過

佐波郡境町の市街部は、一般国道354号を中心に開いているが、近年、交通量の増加が著しく、ラッシュ時の渋滞は年ごとに激化し、その緩和策は住民の要請となっていた。そこで、群馬県ではその緩和のため、境バイパスを現道の北側（市街地北縁）に建設することになった。

その計画路線内には、4か所の埋蔵文化財包蔵地が含まれ、早川以西については境町教育委員会が、都市計画・周辺のは場整備と合せて、昭和53・54年度に発掘調査を実施した。

しかし、早川以東の上武国道と交差する地点は、群馬県土木部が早川の橋梁工事で合せて工事を行なうこととなった。たまたま、この地点には、古墳時代の土師器が散見されたことから、昭和54年度において発掘調査を終了させるべく予算化された。しかし、用地未買収や調査主体の体制等の問題から、発掘調査に入ったのは3月に入ってからであった。

そのため、調査はいきおい遺構の所在を確かめるための予備調査的な色彩をもたざるを得なくなり、その線で進められることになった。なお、このバイパスは、完成後は北関東縦断の広域幹線道路として、一般国道354号の交通緩和に寄与することになる。

三ツ木越戸遺跡は、群馬県佐波郡境町大字三ツ木字越戸～皿沼地区に所在する。佐波郡東村付近をほぼ南北に流れる早川は、下淵名・花香塚付近で南東に流れを変え、さらに三ツ木、小角田に挟まれる地区で再び南へ向って流路を変えてゆく。遺跡地は、この三ツ木—小角田地区にはさまれた地域の早川左岸に位置し、西に早川、北に上武国道予定地、東に県道大根—小角田前線が発掘地を限る。遺跡現状は、畑地である。

II 発掘調査の経過

三ツ木越戸遺跡の発掘調査は第1次を昭和55年3月17日～3月29日、第2次を5月12日～5月30日まで実施した。その経過を略記すると次の通りである。

1 第1次調査

- | | |
|----------|-------------------------------|
| 3月15日(土) | 事業団にて調査の打合せと準備 |
| 3月17日(月) | 器材搬入、トレンチ設定 |
| 3月18日(火) | 第1トレンチ(Tr)、テストピット(TP)掘開 |
| 3月19日(水) | 第1Tr、TPセクション実測、写真撮影、第2Tr、TP掘開 |
| 3月20日(木) | 第2Tr、TPセクション実測、写真撮影、第3Tr、TP掘開 |
| 3月21日(金) | 第3Tr、TPセクション実測、写真撮影、第4Tr、TP掘開 |
| 3月22日(土) | 第4Tr、TPセクション実測、写真撮影、第5Tr、TP掘開 |

3月24日(月) 第5 Tr, TP セクション実測、写真撮影、第6第7 Tr, TP 掘開
3月25日(火) 第6第7 Tr, TP セクション実測、写真撮影
3月26日(水) 第8 Tr, TP セクション実測、写真撮影、第9 Tr, TP 掘開
3月27日(木) 第9 Tr, TP セクション実測、写真撮影、遺物整理
3月28日(金) 遺跡の測量、写真撮影、遺物整理
3月29日(土) 図面整理

2 第2次調査

5月10日(土)晴 調査打合せ
5月12日(月)晴 トレンチ設定、掘開、二次堆積ローム及び砂層の確認
5月13日(火)曇のち小雨 トレンチ掘開、住居2軒検出
5月14日(水)晴 トレンチ掘開と排土作業、住居2軒、土壇2基、溝状遺構1条検出
5月15日(木)曇のち雨 トレンチ掘開と排土作業、1号～3号住居調査、トレンチセクション調査
5月16日(金)雨 作業中止
5月17日(土)晴 1号～3号住居調査トレンチ調査
5月19日(月)晴のち曇 1号～4号住居及び溝状遺構の調査、トレンチ調査
5月20日(火)曇 1号～4号住居、溝状遺構、1、2号土壇調査
5月21日(水)晴 作業中止
5月22日(木)晴 2号～4号住居、溝状遺構及び2号土壇調査
5月23日(金)晴 1号～4号住居、溝状遺構及び1号、2号土壇調査
5月24日(土)晴 作業中止
5月26日(月)小雨 1号～3号住居調査
5月27日(火)晴 1号、3号住居調査、遺物整理
5月28日(水)晴 遺構の写真撮影、遺物整理
5月29日(木)晴 遺物整理、図面整理
5月30日(金)曇 器材撤収 調査終了

III 遺跡の地理的、歴史的環境

三ツ木越戸遺跡は群馬県佐波郡境町大字三ツ木字越戸及び皿沼地区に所在する。北を建設中の上武国道、東を県道大原・境線、西を早川が流れており、早川の後背地に位置する。赤城山の裾野が低地に変換する部分に当たり、湫名台地、木崎台地等が広がり、大間々扇状地下の伏流水が扇端部で湧水となり南北方向の中小河川を形成し、これらの低台地を浸蝕している。早川も伏流水から流れ出る河川であり、低台地を浸蝕しつつ、かつては広範囲にわたり流路を変えていたようである。

遺跡地は標高41～42mで、付近一帯は砂質の土壌で皿沼の字名の如く、水位の高い地域である。

この遺跡の周辺には遺跡が多く、その対象も先土器時代から中世に至る時期の遺跡を含んでいる。遺跡の南方にある中江田遺跡周辺の先土器文化は、この周辺における最古の遺跡であり、小角田前遺跡では縄文後期の住居跡を検出している⁽¹⁾。早川の改修に伴って調査した三ツ木遺跡では、古墳時代～平安時代の遺構の調査がなされ、更に、上武国道建設の事前調査により、歌舞伎、小角田前、三ツ木、西今井、下湫名、の各遺跡が調査されている⁽²⁾⁽³⁾⁽⁴⁾⁽⁵⁾⁽⁶⁾⁽⁷⁾。

早川右岸では土地地区画整理事業に伴う西林遺跡⁽⁸⁾、北西方では圃場整備事業に伴う上矢島遺跡⁽⁹⁾において平安期の遺構が調査されている。

西方には利根川左岸に下武士古墳群、東方に小角田古墳群が存在する。北西には榛名山一峰二ツ岳給源の角閃石安山岩使用の雷電神社古墳及び上湫名遺跡周辺にも古墳群がある。又、この西方には佐位郡衙関連遺跡である国指定史跡の十三宝塚遺跡が存在する。

下湫名に隣接する延喜式内社「大国神社」は、佐位郡司であった檜前君の祭祀になったものと推定される古名社である。

古墳時代から続く大集落を支えてきたと思われる生産を基盤に中世になると新田一族が新田荘に勢力を張り、その関連の史跡が存在している。

南方には古名刹で県指定史跡の長楽寺があり、付近には日光例幣使街道が通っているなど、本遺跡周辺は古代より開けていた地域である。

挿図1 遺跡周辺の地形



1. 三ッ木越戸遺跡 2. 中江田先土器時代遺跡 3. 三ッ木遺跡 4. 歌舞伎遺跡
 5. 小角田前遺跡 6. 西今井遺跡 7. 下淵名遺跡 8. 上矢島遺跡 9. 西林遺跡
 10. 長楽寺 11. 雷電神社古墳 12. 上淵名遺跡 13. 十三宝塚遺跡 14. 大国神社
 15. 矢拔神社古墳 16. 武士古墳群

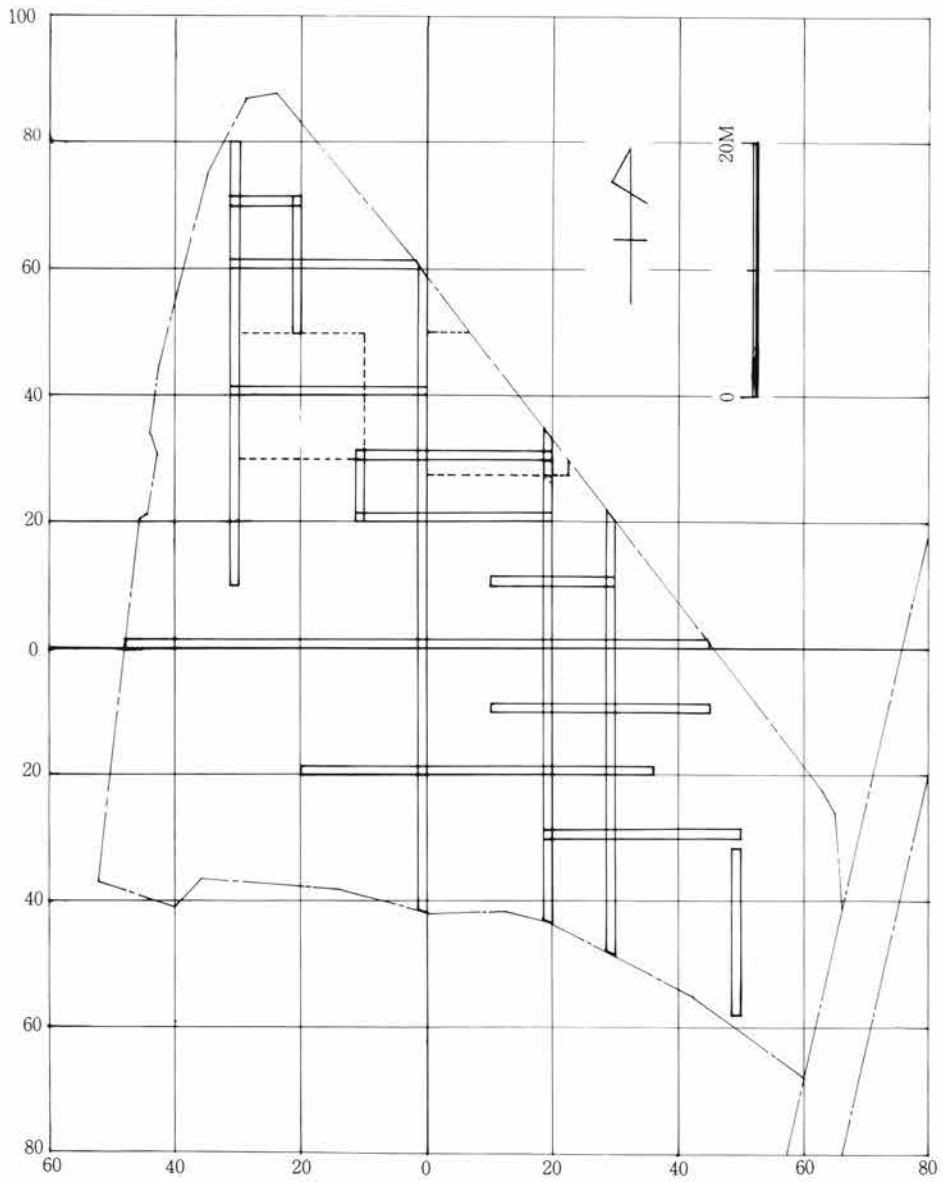
IV 三ツ木越戸遺跡の調査

1 第1次調査(予備調査)

本遺跡は早川の後背地で水田及び桑園となっており、調査対象面積は9200㎡である。標高は西端で約41m、東端ではこれより1m程高い。

調査方法は県土木部設置の赤杭No128とNo129とを結ぶ直線(ほぼ東西方向)を基準とし、巾1.5mのトレンチを東西、南北方向に設定した。これを補うため第1、第2トレンチの観察と併行して、第3～第9トレンチを設定掘開を行なった。更に各トレンチ内に適宜テストピットを設定し、土壌の堆積状態を観察した。その結果、北西～東南方向に帯状に広がる二次堆積ローム及び稠密な砂層を確認した。場所により層序に変化があり、西の区域では第1層は砂質の強い暗褐色の耕作土、第2層は鉄分凝集を多量に含む黒褐色土、第3層は鉄分凝集を含む粘性の灰黄色土、第4層は砂層で、数層に分かれる。東の区域の第1層は西の区域と同じ耕作土、第2層は淡黄褐色の二次堆積ローム層、第3層は鉄分凝集を含む灰色土層、第4層は灰褐色を呈する砂層、第5層は粘性の強い灰色土層である。

今回の調査は上記の二次堆積ローム及び稠密な砂層上面まで掘開し遺構の検出を試みたが検出できず、この地層下は第2次調査に託すこととなった。



挿図2 トレンチ設定図

2 第 2 次 調 査

第1次調査をふまえて帯状に広がる二次堆積ロームと稠密な砂層区域の調査を実施した。第1次の調査方法を踏襲し、巾1.5mのトレンチ方法により二次堆積ローム及び砂層下まで掘開した結果、調査区域の東南隅と北西区域とで住居、溝状遺構及び土壇を検出し、この部分を拡張、調査を実施した。検出した遺構は北東隅で竪穴住居3軒、土壇1基、北西区域で竪穴住居1軒、溝状遺構1条、土壇1基である。

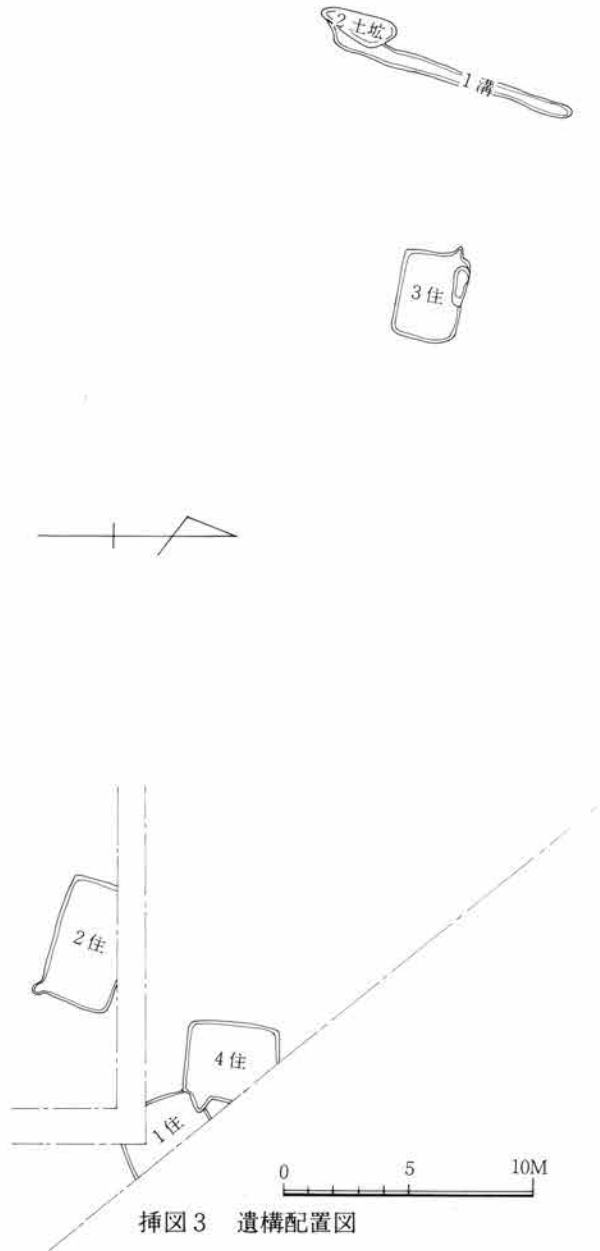
遺構検出区域の土層をみると、北東隅では、最上層が砂質の暗褐色の耕作土(20cm)、第2層は稠密な、黄褐色の砂層で鉄分凝集を含んでおり、数回にわたり堆積したことがうかがわれる。

(60cm)

北西区域では、第1層は北東隅と同じで、第2層はやや粘性を帯びた淡黄褐色の二次堆積ローム層(40cm)である。この区域に隣接する西の地域では、第

2層以下は灰黒色土及び灰白色土と続き粘性の強い土である。

東南隅及び北西区域で検出した遺構は、第2層まで掘り込んでいる。

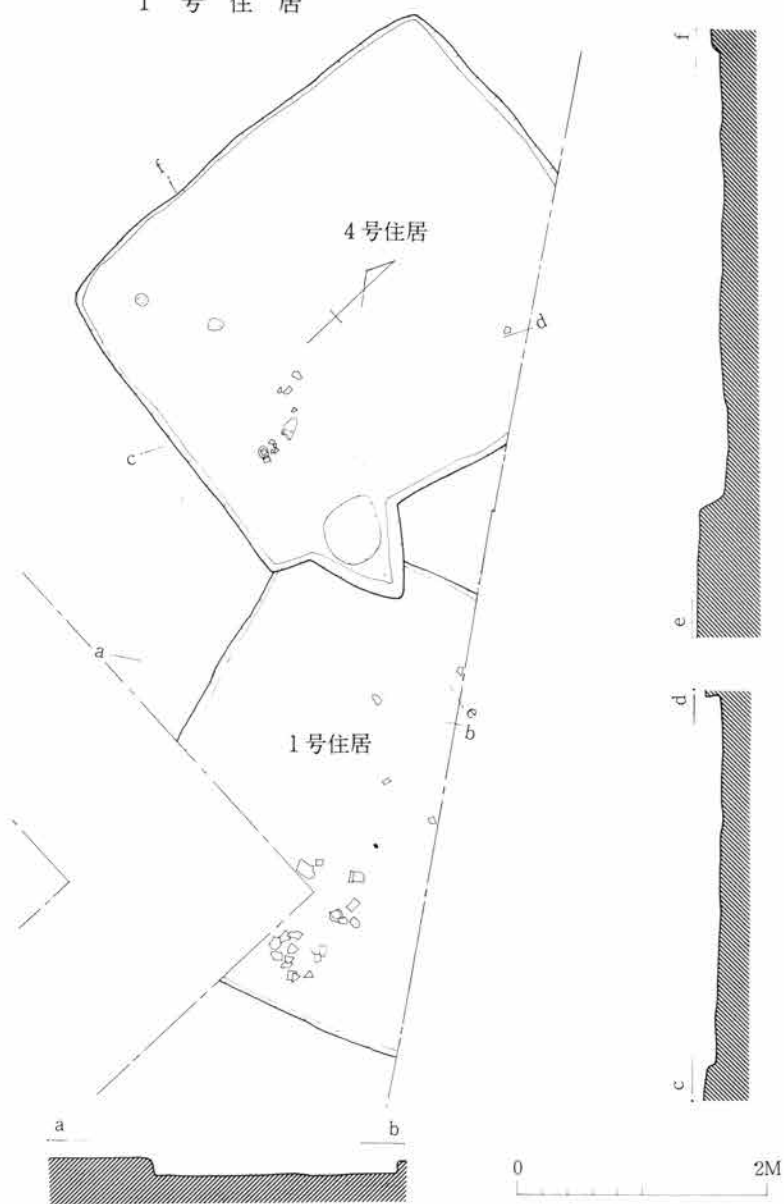


挿図3 遺構配置図

(1) 遺 構

① 竖穴住居

1 号 住 居



挿図4 1号住居及び4号住居

遺物は南壁際に分布しており碗、高台碗、土釜羽釜等の破片が出土した。

調査対象区域の北東隅に位置し調査対象区域外へと続き、又遺構確認のためのトレンチ掘開により一部を削除したこと、更に4号住居との重複のため遺構の全貌は明らかではないが、一辺は3.56mである。掘り込みは稠密な黄褐色の砂層までで床には貼床が施こされやや堅くしまった程度でほぼ水平である。遺構検出範囲内において、焼土、灰の遺物、貯蔵穴、ピット等の施設は確認できなかった。

北西コーナーは4号住居のカマドで切られており、4号住居の床面高と比較すると1号住居が60cmほど高くなっている。

壁高は遺構確認面から20cmほどである。

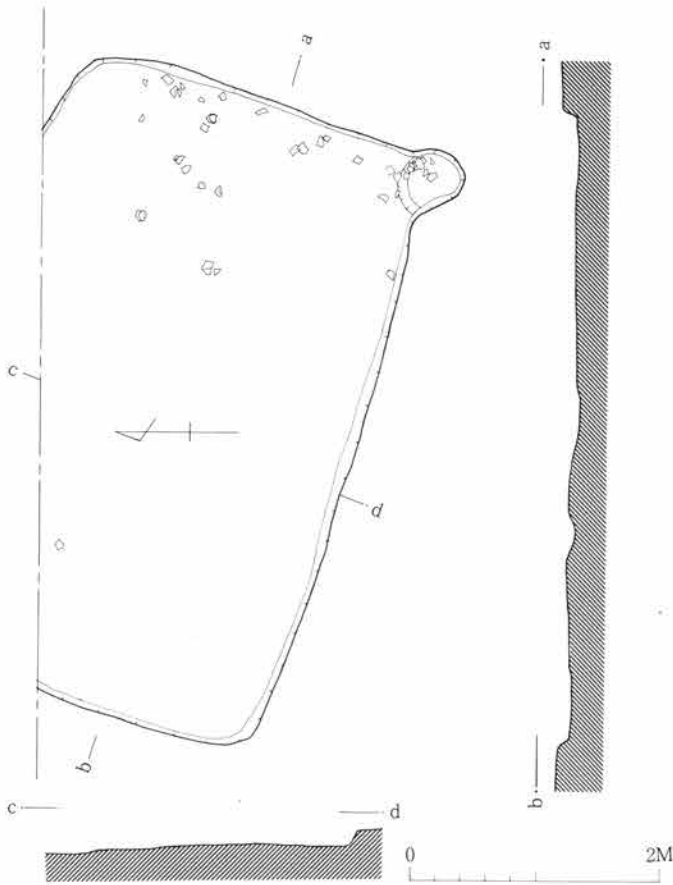
2号住居

1号住居の西南に隣接し、遺構確認のトレンチ掘開により北壁を削除されているが、ほぼ隅丸長方形プランをもつと推定される。規模は南北2.95m(推定)、東西4.95mで、1号住居同様、稠密な黄褐色砂層まで掘り込んでいる。主軸はS-72-Eである。床面は貼床が施こされ、カマドの前がややしまっている程度である。

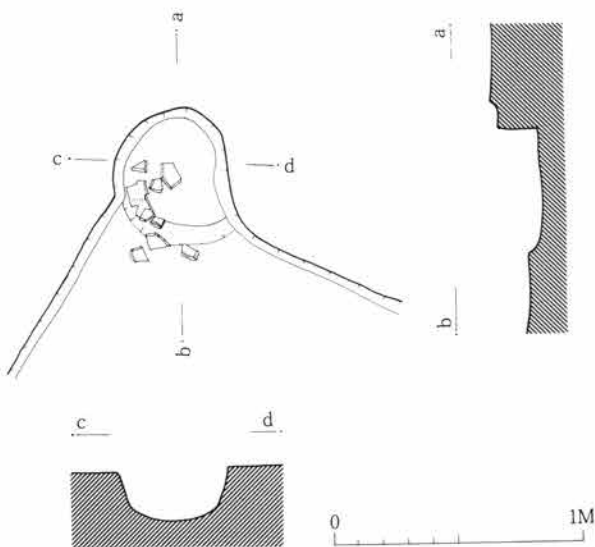
カマドは東南隅で壁外へせり出し円形プランである。粘土を素材にし地山を掘り込み構築している。焚口巾は45cm、全長50cmで燃焼部はカマド奥に向ってやや傾斜している。

壁高は遺構確認面から15cmほどであり、地山が稠密な砂層のため壁の遺存状態は比較的良好である。しかし、耕作が深くまで行なわれており、随所に攪乱がみられる。

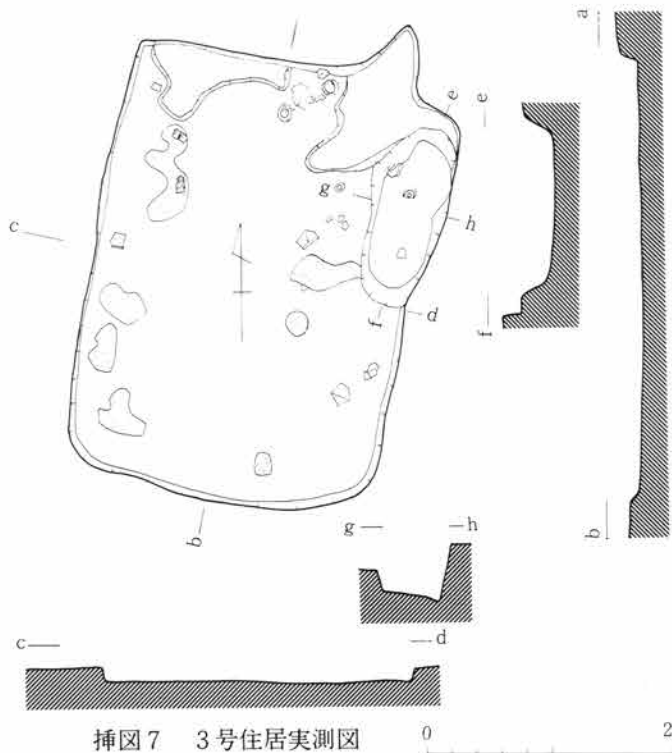
出土遺物はほぼ全面に分布していたが、完形品は皆無であり、碗、土釜等の破片のみである。殆んど遺物が雑な作りである。



挿図5 2号住居実測図



挿図6 2号住居カマド実測図



挿図7 3号住居実測図

3号住居

隅丸長方形のプランをもち、規模は南北3.46m、東西2.48mである。北及び西壁はほぼ直であるが、南壁は20cmほど弧をえがいている。東壁は貯蔵穴が壁際にあるため、やや外側に張り出している。主軸はN-10°-Eである。

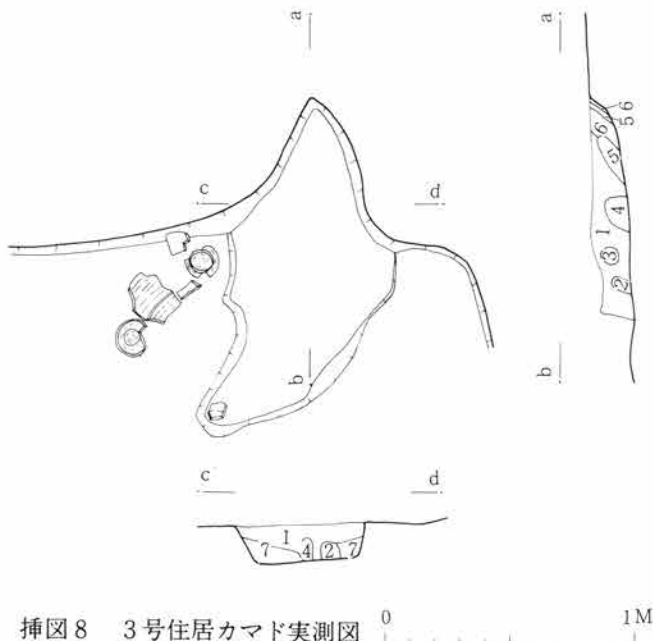
やや粘性を帯びた淡黄褐色を呈する二次堆積ロームまで掘り込み、壁高は遺構確認面より10cmほどである。床面は壁際以外は比較的しまっており、

特にカマド付近が顕著である。

カマドは北壁の東寄りて粘土を素材にして壁外に構築され三角形のプランをもつ。カマドの前は浅く掘り込まれ焼土と灰が推積していたが、カマド内にはそれらの堆積が殆んどみられなかった。

東壁の北寄りには楕円形プランをもつ貯蔵穴があり、壁際の北寄りは住居の壁を多少ながらえぐるかたちである。断面は平底状を呈し住居の床面からの深さは20cmほどである。埋土は黒褐色土でその中に灰、焼土及び炭化物の粒子が多量に含まれている。更に長さ15cmほどの炭化物や羽釜の口縁部片、土師器の高台碗片等もあった。

北、西、南壁際に焼土と炭化物



挿図8 3号住居カマド実測図

- 1 焼土とロームを含む灰黒色土
- 2 焼土とロームを含む灰褐色土
- 3 焼土と灰を多量に含む灰黒色土
- 4 焼土とロームを含むやや砂質の灰黒色土
- 5 焼土とロームを含む灰褐色土（2層より含有量が多い）
- 6 焼土とロームを含む暗黄褐色土
- 7 焼土とロームを含む灰黒色土（1層より含有量が多い）

とが帯状に存在しているが、中央部にはそれがみられない。

遺物はカマドの西寄りに羽釜口縁部片、土師器高台碗等が、又、貯蔵穴の西寄りから土釜片が出土している。カマド内の遺物は皆無で概してカマド周辺から出土している。

カマドの前、及び貯蔵穴内には灰と焼土が多量に存在していたにもかかわらず、カマド内にはそれがないことより、カマド内の灰をかきだし貯蔵穴内におとしたとみられる。

4 号 住 居

北東隅は調査区域外へと続くため全貌は明らかではないが、不正方形プランをもつと思われ、東壁はやや開きぎみである。住居の東部分は1号住居と同様に稠密な黄褐色砂、西部分はやや粘性を帯びた淡黄褐色の二次堆積ロームまで掘り込んでいる。

規模は南北3.62m、東西は現状で最大値、3.14mで、主軸はN-4°-Eである。床面はカマド付近がややしまっている程度である。

カマドは東壁の南寄りで1号住居の北西コーナーを掘り込んでいる。主体部を壁外におき三角形のプランをもつ。カマドの前に灰の分布がみられわずかではあるが床面より低くなっている。貯蔵穴等の施設は確認できなかった。

遺物はカマド付近より数点出土し、南西コーナー付近より本遺跡唯一の完形品である灯明皿が出土している。

② 溝状遺構

3号住居の4m西方を西南西から東北東へ走向している。やや粘性を帯びた淡黄褐色の二次堆積ロームまで掘り込み、巾は約0.4m長さ10.1mである。遺構確認面からの深さは15cm内外で、断面は碗底状である。ほぼ直線に走向し2号土壇と切り合い消滅している。

埋土は地山の淡黄褐色ロームを含む灰黒褐色土で水の流れた形跡は見られない。遺物の出土も無く時期は不明であるが、2号土壇を切っているのも、それよりも新しい時期の遺構である。

③ 土 壇

2号住居の東南方約4mに1号土壇、更に溝状遺構の南端部で2号土壇を各1基ずつ検出した。

1号土壇の規模は南北0.88m、東西0.56mである。遺構確認面からの掘り方は比較的浅く、断面は碗底状をなしている。出土遺物は無く時期は確定できない。

2号土壇は規模が南北2.26m、東西0.76mで楕円形プランをもつ、遺構確認面からの掘り方の深さは50cmほどで、断面は碗底状である。北側を溝状遺構により切られている。遺物の出土は無く時期は確定できないが、溝状遺構より古いことがうかがわれる。

(2) 遺 物

1 号 住 居

1号住居は遺物の出土数は比較的多いが、すべて破片で、概して成形及び焼成が不良であり、碗型土器、炊飯用土器が主である。

技術的にはへら及び指による調整、土器の底部は回転糸切り後、整形している。

埋土中より古墳時代の遺物が出土しており、周辺に遺構の存在が予想される。

1号住居出土遺物一覧

No	器種	法量	色調	胎土	技法等
1 (p12)	碗型 土器	口径11.4cm	灰色	砂粒	口縁部一部残存。外面は横ナデ、砂粒痕、内面も横ナデ、ロクロ痕、焼成やや不良
2 (p25)	高台碗	底径6.4cm	灰色	砂粒	底部残存。付高台、回転糸切り後ナデ、二次焼成痕
3 (p8)	高台碗	底径8.8cm	灰褐色	砂粒	底部破片、体部に底部を接着。横ナデ、回転糸切後整形。亀裂、成形、焼成共に不良。内外面スス付着。二次焼成痕
4 (p15)	土釜	底径7.2cm	灰黄色	砂粒	底部残存。外面は横ナデ、スス付着、切離後へらナデ、器面に亀裂、凹凸、内面は横ナデ、砂粒痕、焼成不良
5 (p3)	土釜	口径20.6cm	灰黄色	砂粒	口縁部破片、体部はゆるやかな彎曲をなし、口唇部は「く」の字形に外反し、横ナデ。内、外面共に横と斜方向へのナデ、砂粒痕、スス付着、焼成不良
6 (p30)	羽釜	口径17cm	赤褐色	砂粒 (小礫混入)	口縁部破片、体部は強く彎曲、口縁部やや内傾、口縁部端は丸み、罅は断面三角形状、輪積み痕、横ナデ、外面成形は雑、内外面に亀裂、二次焼成痕

2号住居

2号住居は遺物の出土数は多いが全てが破片であり、炊飯用土器が多い。土器の成形は良好であるが殆んど焼成不良である。技術的にはへら及び指による横ナデ及び櫛状工具による整形である。

2号住居出土遺物一覧

No	器種	法量	色調	胎土	技法等
1 (p40)	皿	口径11cm	灰色(外面) 淡緑色 (内面)	緻密(良)	口縁部小破片、緑釉陶器、外彎した体部から、やや内反りぎみの口唇部となる。ロクロ横ナデ、外面の口縁部よりに低い段、段より下部に施釉、焼成良好
2 (p39)	碗	底径5.3cm	灰褐色	砂粒	底部残存。回転へら切り、凹凸、内外面共に横ナデ、内面にうず巻、中央部に突出部、焼成やや不良、断面3層に分離
3 (p22)	高台碗	底部8cm	灰色	砂粒	底部残存。回転糸切り後、整形、内外面共に横ナデ、二次焼成痕

4 (P54)	碗型 土器	口径15.8cm	灰色(外面) 黒色(内面)	砂粒	口縁部破片、外面は指ナデ、指痕、内面は横ナデ後、内黒を施す。内外面共に亀裂、体部はゆるやかに内彎。口唇部先端は肥厚。焼成不良
5 (P46)	土釜	口径20.2cm	灰褐色	砂粒	口縁部破片。体部はゆるやかに内彎、口唇部は体部の上部の浅い段より、ゆるやかに外反する。指ナデ、整形時の凹凸有り、焼成不良。二次焼成痕
6 (P8)	土釜	口径22.3cm	灰黄色	砂粒 (小礫混入)	口縁部破片、体部はゆるやかに内彎、口唇部はやや「く」の字形に外反、櫛状工具による横方向整形外面は指ナデ整形で、整形時の凹凸有り、内面は櫛状工具による横方向整形
7 (P20)	土釜	口径24.4cm	灰色	良	口縁部破片、内彎する体部からゆるやかに口唇部が外反する。先端は平坦状、口唇部は横ナデ、整形時の爪形状の痕有り。内面は櫛状工具による横方向整形、焼成不良
8 (P16)	土釜	口径24.8cm	灰色	良	口縁部残存。体部はゆるやかに内彎、口唇部は「く」の字に外反、櫛状工具による横方向整形、内外面共に横ナデ、輪積み痕、焼成不良

3号住居

3号住居は碗型土器が多く炊飯用土器が少なく全て破片である。羽釜は成形が雑であるが、他の土器は概していいである。技術的にはへら及び指による横なで整形を施し碗は底部は回転糸切り後、付け高台を付し、横ナデしている

3号住居出土遺物一覧

No.	器種	法量	色調	胎土	技法等
1 (P1)	灯明皿	口径10.6cm 底径 5.8cm 器高 3cm	灰色	良	底部より中程までは輪積み痕有り、口縁部はやや内反りぎみに立ち上がる。底部は回転糸切り後、へら整形、糸痕、坏部の内面は横なで、ロクロ痕、二次焼成痕
2 (P2)	高台碗	口径13.6cm 底径 5.9cm 器高 5cm	灰色	良	内彎する体部からやや外反ぎみの口唇部となり、器肉は薄く、美しい器形である。体部に比較して、底部はやや厚い。内外面共に横ナデのロクロ痕、付高台で、大きく、外反し指なで整形、底部は回転糸切り後、指ナデ
3 (P7)	碗型 土器	口径14.4cm	灰色(外面) 黒色(内面)	砂粒	口縁部破片、器肉はやや厚く口唇部先端は凹凸がある。外面は横ナデだが、雑で凹凸が著るしい、内面は横ナデ後、内黒。剝離

					部分が多く、特に口唇部が著しい。焼成不良
4 (P 6)	高台碗	口径14.6cm	褐色	砂粒	やや外に開く高台部から体部が大きく外反し、中央部よりゆるやかに内彎し、口唇部は内ソギ、輪積みのロクロ痕が明瞭で横ナデ整形、体部内面は横ナデ整形、外面の整形は比較的ていねいだが、内面は雑。底部は回転糸切り後指なで
5 (P 19)	高台碗	口径15.6cm 底径 8.4cm 器高 6.4cm	黒褐色	砂粒 (小礫混入)	1/4残存、体部は内彎し、口縁部はゆるやかに外反する。高台はやや外側に広き、しっかりしている。外面はロクロ痕、スス付着、内面は研磨
6 (P 5)	羽釜	口径32.4cm	赤褐色	砂粒 (小礫混入)	やや内彎する体部に三角形の鋸を付す、口縁部は内反りし、先端部はやや平坦。体部は横ナデを施しているが輪積み痕が明瞭、雑な整形、スス付着

4号住居

4号住居は出土遺物が少なく、他の住居と異なり炉飯用土器が出土していない。

技術的にはヘラ及び指による横なで整形、碗は底部は回転糸切り後、高台を付して横ナデしている。

4号住居出土遺物一覧

No	器種	法量	色調	胎土	技法等
1 (P 4 と6)	坏型土器	底径 5.7cm	灰色	良	底部残存、器肉薄手、回転糸切り後ヘラ整形、糸痕、底部からゆるやかに内彎する体部は指ナデ、スス付着。底部内面指ナデ
2 (P 1)	灯明皿	口径 10cm 底径 6.1cm 器高 2.5cm	灰色	砂粒	全体的に歪みもち、回転糸切り後、調整した底部は斜めに胎土と切離す。体部は内彎する。指による横ナデ、ロクロ痕、底部切離の糸痕が体部に残る。内面は指による横ナデ、ロクロ痕
3 (P 2)	高台碗	口径14.0cm 底径 5.6cm 器高 7cm	灰色(外面) 黒色(内面)	良	体部は内彎し、口唇部は外反きみで美しい器形である。器肉は薄くロクロ痕あり、外面は成形がやや雑、内面は研磨し、部分的に内黒を施す。高台は体部から垂直にのびた後、外反、指による横ナデ、焼成やや不良

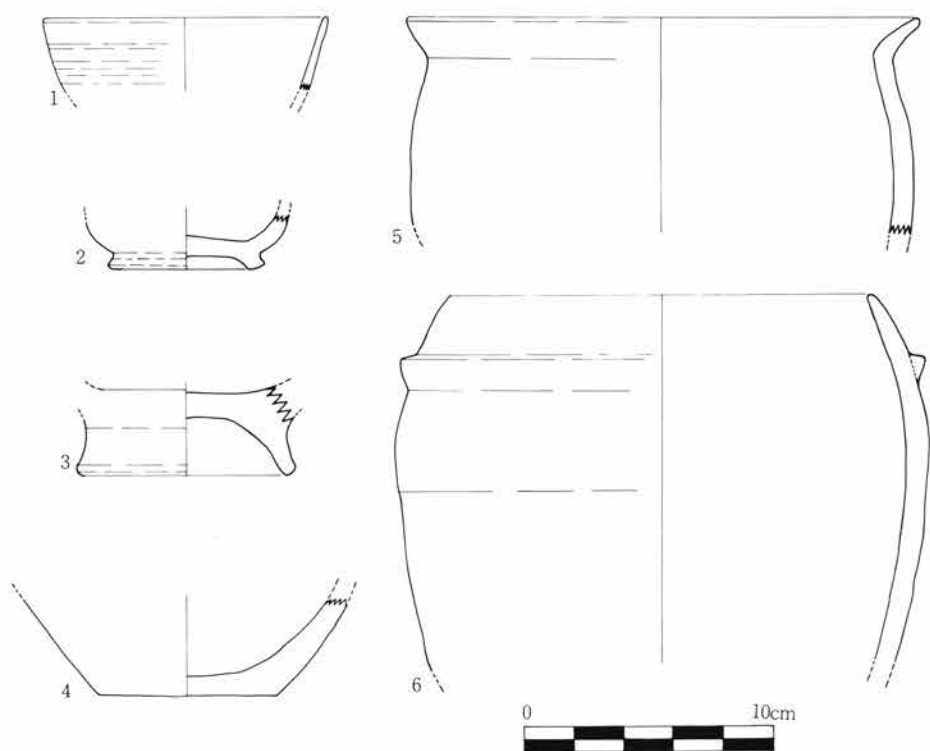


插图9 1号住居出土遺物

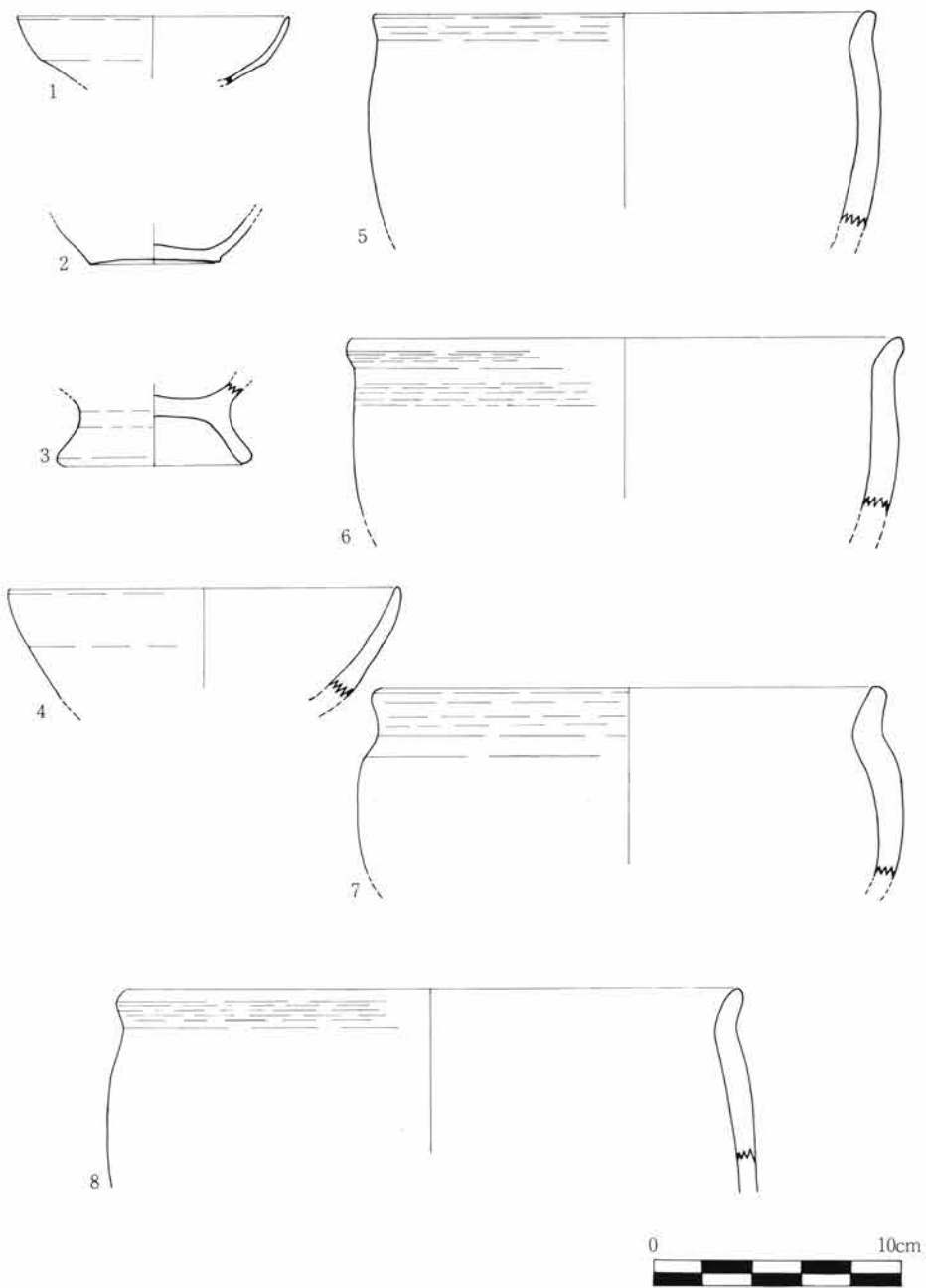


插图10 2号住居出土遺物

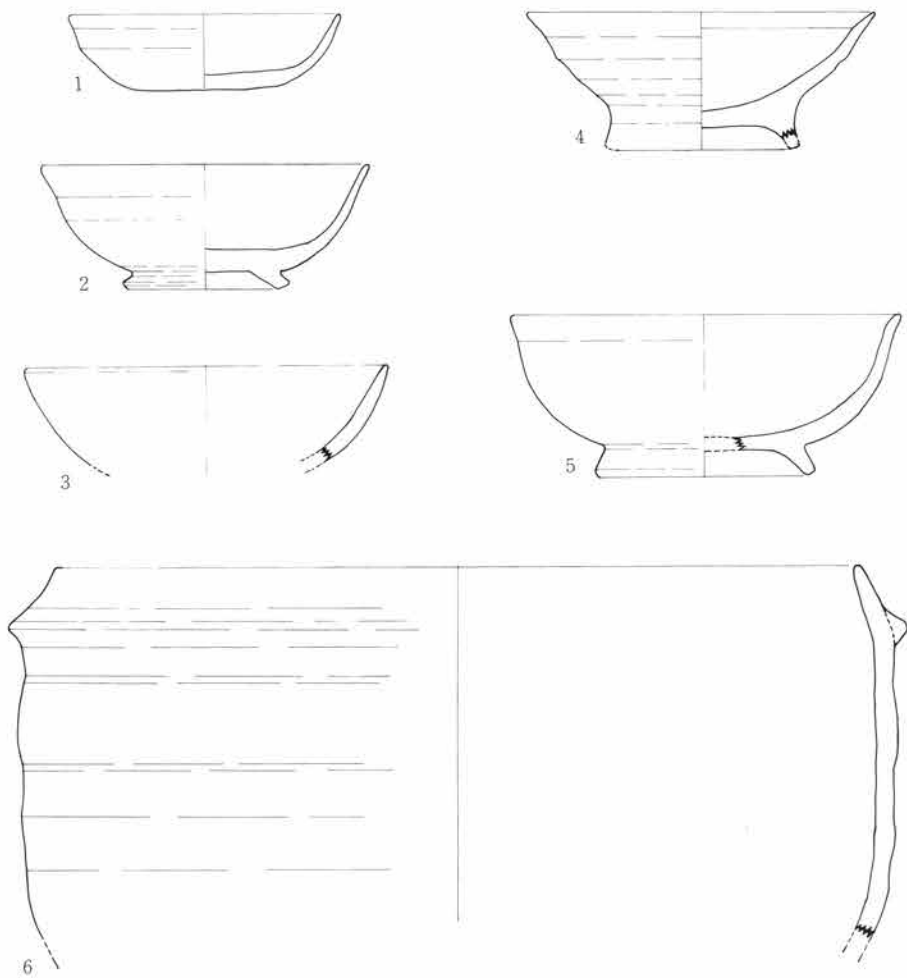


插图11 3号住居出土遺物

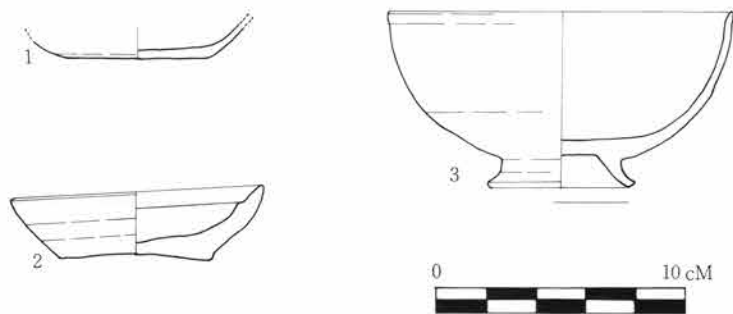


插图12 4号住居出土遺物



V ま と め

1 遺 構 と 時 期

三ツ木越戸遺跡において調査した遺構は竪穴住居4軒、溝状遺構1条、土壇2基である。

住居は調査区域外へ続くものや重複等により、全貌の判明したのは1軒のみである。

住居の構造をみるとプランは隅丸長方形と台形である。柱穴、周溝は4軒とも検出できず、貯蔵穴は3号居のみ検出した。

床面は貼床を施した住居と施していない住居が各々2軒ずつである。カマド付近はかたく踏みしめられているが、周辺部にはそれがみられない。

カマドは3軒で検出し、各れも主体部を壁外へせり出している。構築位置は東南隅、東壁南寄り、北壁東寄りと各々異なっている。プランは半円形1、三角形2で粘土を素材としている。

遺物はカマド周辺に多く検出され、4号住居の灯明皿以外は破片である。個々の住居からの出土遺物は器制が多少異なるものの、技法、形態等からみて共通点が多く、これらの住居がほぼ同時期に存在したと考えられる。

本遺跡で検出した住居は2期に分けられる。

I期は炊飯用土器に羽釜、盛器に環、碗、高台碗を主とする。羽釜は口縁部が短かく内傾して立ち、鋳部は断面三角形を呈する。体部には輪積み痕を明瞭に残している。

三ツ木越戸遺跡住居一覧

No	形状規模	主軸方向	かまど		施設	遺物	備考
			位置	つくり			
1	不明 356×	N-20°-E	不明	不明		高台碗、羽釜、土釜	貼床 1住→4住
2	隅丸長方形 295×495	N-18°-W	東南隅	粘土		碗、高台碗、皿、土釜、 緑釉陶器	貼床
3	隅丸長方形 248×346	N-10°-E	北壁 東寄り	粘土	貯蔵穴?	環、高台碗、羽釜、灯明皿	
4	台形 314×362	N-4°-E	東壁 南寄り	粘土		高台碗、灯明皿	1住→4住

環は体部に輪積み痕を残し、底部は回転糸切り後ナデ整形を施しているが雑である。高台碗は口唇部が外反し、底部は回転糸切り後、周囲のみ指などを施し、高台は短かい付高台で、内黒の施こされたものもある。

II期は炊飯用土器に羽釜及び土釜、盛器に碗、高台碗を用いている。羽釜はやや内傾ぎみの口縁部で鋳はやや上向きである。土釜は頸部のしまりが僅かに認められ、短かく外反する口縁部と

やや大きい平底とがみられる。量的には土釜が多い。碗、高台碗は回転糸切り後、ナデ整形しているが雑で、高台は「ハ」の字に開く付高台である。概して成形が雑で、焼成は低火度である。灯明皿は、いわゆる「カワラケ」で、胎土に砂粒を多く含み、整形も指ナデによる痕跡が明瞭にのこっている。また成形段階の器面の凹凸が調整しきれずのこったり、器形に歪みがあるものもある。

三ッ木越戸遺跡の時期

既に述べてきたように、三ッ木越戸遺跡における遺構、遺物は極く少ないものである。その中で、その時期を論ずることは至難のことであるが、ここでは、県下における調査例と合せてみて、その時期について考察し、遺跡の性格について論じることとする。

遺構の面でみると

- 1) 小型の隅丸方形の形状を呈するものが多いこと
- 2) 住居の施設としては粘土カマドをもつことが共通点であるが、位置は住居のコーナーに集中する傾向があること
- 3) 柱穴はすべて欠いているが、一部貯蔵穴状の掘りこみをもつものがある。
- 4) 主軸の方向は区々であるが、磁北からのズレは20°以内におさまること
- 5) 1溝は集落の西限を限る溝である可能性が強い。

等の点を指摘することができる。

また、遺物の面でみると

- 1) 各住居の出土遺物では羽釜、土釜類、高台碗、碗、皿が一般的で、坏、緑釉陶器を含むものがある。
- 2) 羽釜は全般に輪積み痕をのこし、つばは粘土紐を貼りつけた形のものが多い。
- 3) 高台碗の高台は接地部分が内側にくるものが多く、糸切り後の付け高台である。
- 4) 高台碗の中には黒色処理されたもので粗製のものが多いが、中にはへらで入念に研磨したものもある。
- 5) 高台が極端に高く「ハ」の字の強いものが多い。
- 6) 灯明皿は3号と4号で出土したが、前者は底部を糸切り後へら調整し、体部はうすくナデもていねいだが、後者は底部は糸切り無調整である。
- 7) 灰釉陶器は硬質の素地に内面及び外面上半に施軸している。

等を指摘することができる。

これらを従来の県内他地域の例と比較してみると、かまどの位置、つくりからみて平安後期の特徴と合致する。特に住居のコーナー部に付設される例は、竪穴住居の最も新しいものに多い傾向である。

遺物面でみると、灯明皿の出現、土釜の盛行「ハ」の字状に高く開く高台などは、県内では主

に浅間B軽石（1108年浅間山の噴火による降下軽石）と関連するものと考えられる遺物の一群である。

また、緑釉陶器は硬質の素地で釉もややうすいどぶづけ手法をとっているもので東濃系のものである。

このようにみえてくると、本遺跡の時期はすべて11世紀に属するものとみて誤りないであろう。

しかし、1号と4号住居の重複関係をみると、その中でも多少の前後関係を考慮せざるを得ない。所見からすれば1号住居が4号住居に先行するものである。そこで、1号と4号の遺物や遺構を比較してみると、遺構の主軸方向が、磁北に近くなる傾向を指摘できる。

遺物の面で見ると、灯明皿の出現以降の住居は4号住居であること、坏、碗の端部の肥厚は4号住居の方が多いこと、高台の特に高く開くものは4号住居にあることなどを指摘できる。

この二つの住居に合わせて考えると3号は1号に近く、2号は4号住居に近い。しかし、実際には両者の間にはさしたる時間差を考えることはできず、大きくは11世紀中葉のものとしてとらえることが妥当と考える。更にこれを細分すれば、1、3号住居跡の一群が中葉前半（11世紀第3四半期初め）に、2、4号住居が中葉後半（11世紀第3四半期終り）ごろのものとして考えられよう。

遺跡は早川の氾濫により台地を削られていることが明らかであるが、この遺跡の時期と同時期に比定される遺跡は中道（越戸遺跡東北東300m）、小角田前遺跡（東南東500m）三ツ木遺跡（西北西400m）でも発見されている。このことからみると、この時期にはかなりの集落が発展していることは推察されるが、小さい支群がこの越戸遺跡周辺にあり、しかもその支群中の西端部を今回の調査で検出したものとみられる。したがって、この4軒の住居群の主たる分布は東側にのびるものと考えられる。

2 三ツ木越戸遺跡と周辺の遺跡

本遺跡の北西に隣接する三ツ木遺跡⁽¹⁰⁾では約180軒におよぶ大集落跡を県教委で調査している。その約8割が国分期に比定される竪穴住居である。上武国道建設予定地内の諸遺跡において、国分期に比定される住居の調査がなされ、この時期になると洪積台地から沖積台地への居住区域の拡大が指摘されている。

早川の右岸の西林遺跡⁽¹¹⁾にも国分期に比定される住居が調査され、標高やロームの堆積状態も本遺跡と共通点がみられる。北西方に所在する上矢島遺跡⁽¹²⁾でも同時期の住居が検出されており、早川周辺には平安時代の遺構の存在が明らかにされている。

かつての早川は川巾が狭く流路が蛇行していたため河川改修が施行され、昭和50年度及び51年度に事前調査を県教委で実施した結果、古墳時代は洪積台地上に、奈良時代は洪積台地を分断する流れの縁辺に、平安時代になると旧河流の沖積土上へも集落を拡大しており、本遺跡は三ツ木遺跡⁽¹³⁾の連続としてとらえられる。かように考えると、周辺を流れる河川の氾濫による肥沃な沖積地

を求めて、洪積台地から沖積台地へと居住区が拡大し、生産量の拡大を画したものであろう。

これらの時代的変遷を経、生産量の拡大を基盤に郡郷制の発展が考えられ、更に生産量の増大に伴う大規模集落の形成が、やがて新田荘を中心とした新田一族の繁栄の遠因にあたると思われる。

最後に本調査を実施するに当りお世話いただいた県土木部道路建設課及び伊勢崎土木事務所等関係諸機関、調査に協力いただいた地元諸氏に、末筆ながら謝意を表する次第である。

注

- 1 群馬県教育委員会「上武国道地域埋蔵文化財発掘調査概報Ⅴ」1978
- 2 群馬県教育委員会「西今井遺跡・三ツ木遺跡」1977
- 3 群馬県教育委員会「上武国道地域埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ・Ⅲ」1975・76
- 4 群馬県教育委員会「上武国道地域埋蔵文化財発掘調査概報Ⅳ・Ⅴ」1977・78
- 5 群馬県教育委員会「上武国道地域埋蔵文化財発掘調査概報Ⅳ」1977
- 6 群馬県教育委員会「上武国道地域埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ・Ⅳ」1976・77
- 7 注6文献に同じ
- 8 境町教育委員会「西林遺跡—第1次発掘調査概要」1979
- 9 境町教育委員会「上矢島遺跡発掘調査概要」1979
- 10 注5文献に同じ
- 11 注5文献に同じ
- 12 注8文献に同じ
- 13 注9文献に同じ
- 14 注2文献に同じ

図版 1



1. 遺跡全景（北西より）



2. 1号住居（西より）



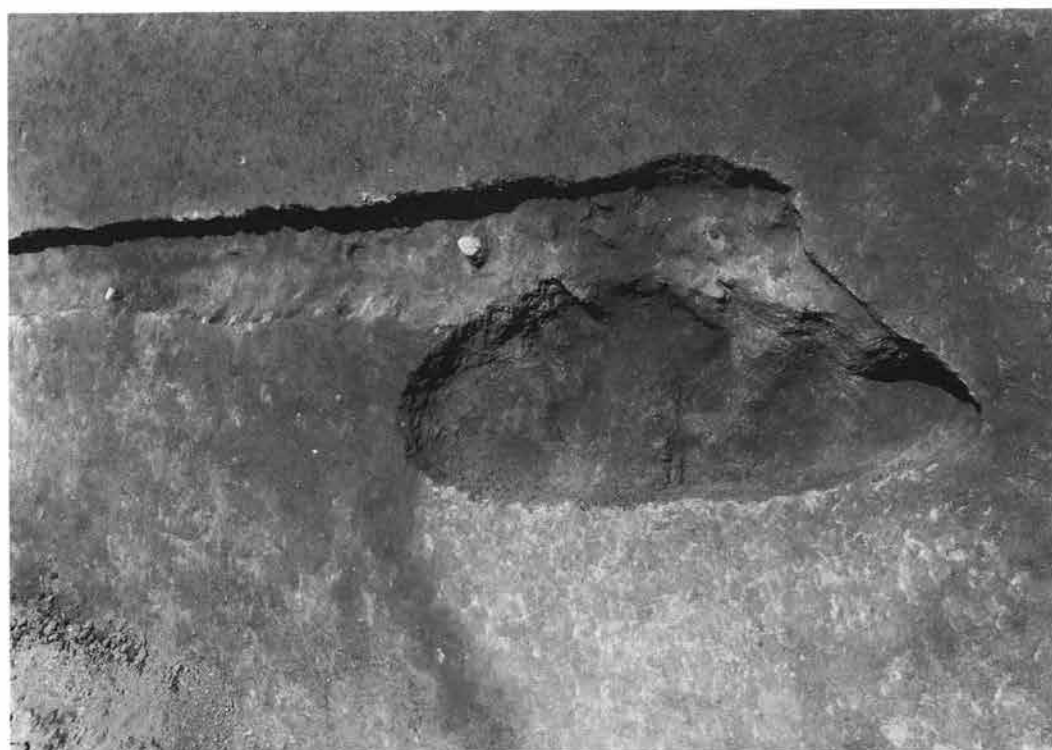
3. 2号住居（西より）



4. 3号住居（南より）



5. 4号住居（西より）



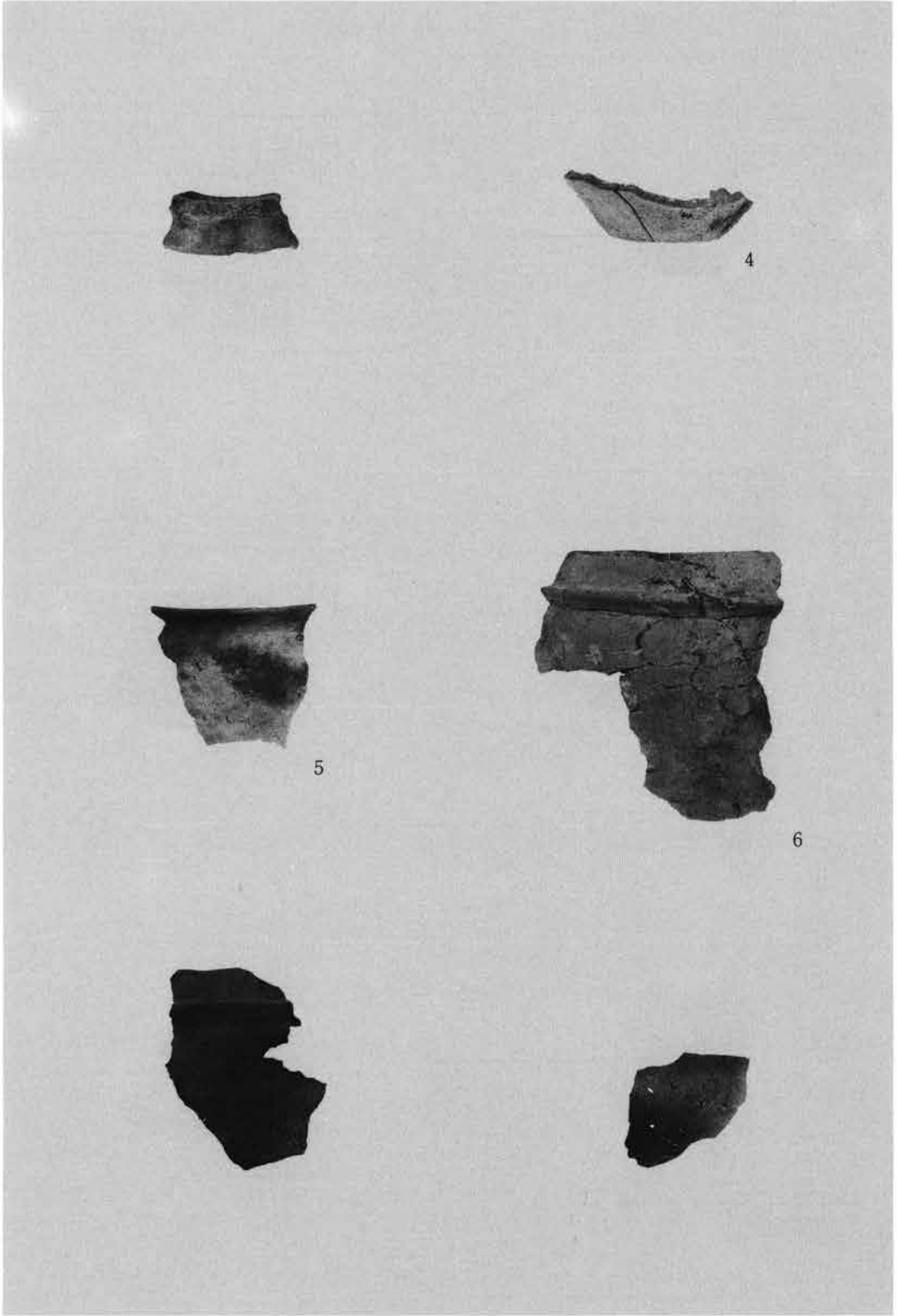
6. 1号溝と2号土坑（東より）



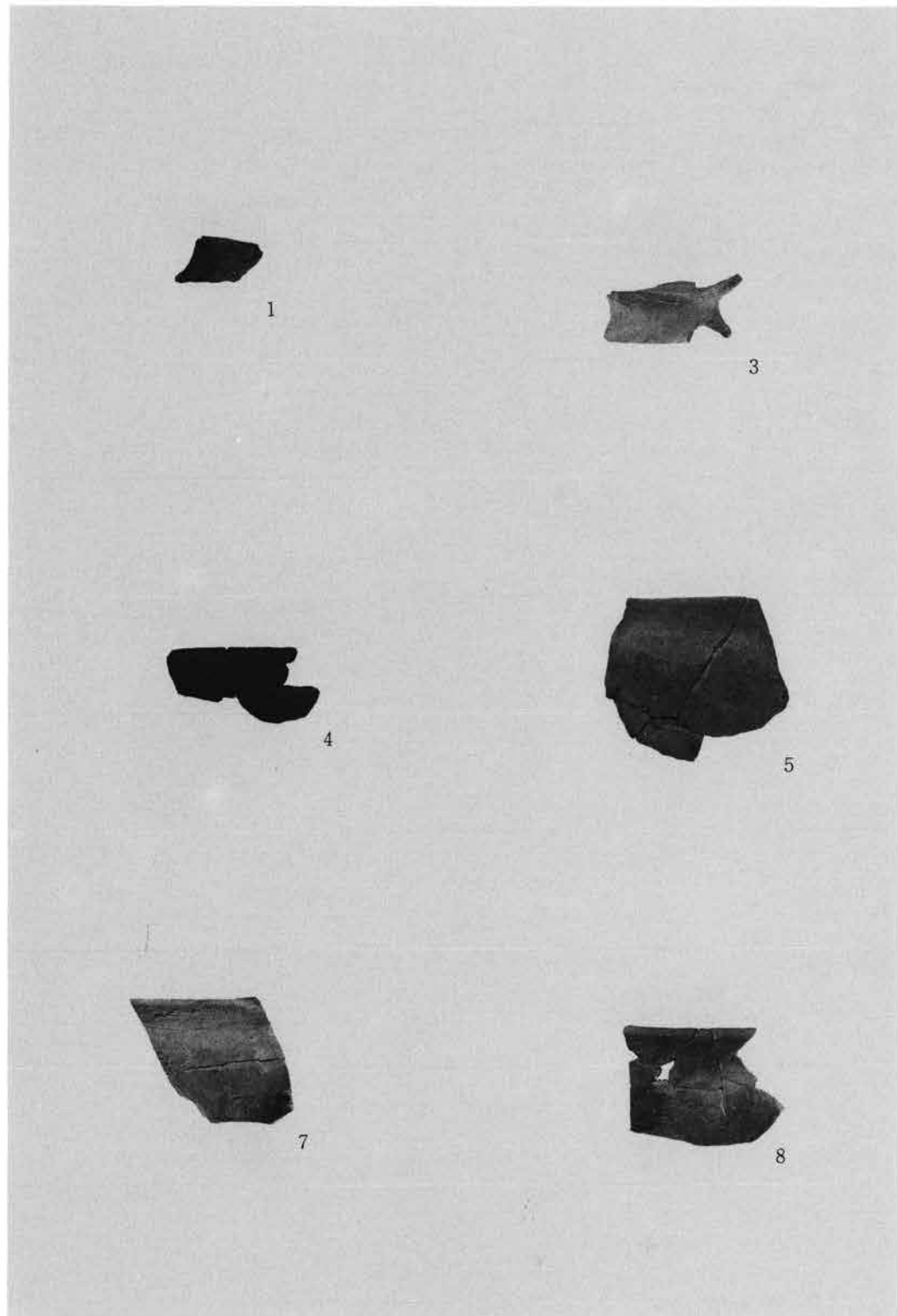
7 3号住居遺物出土状況(南より)



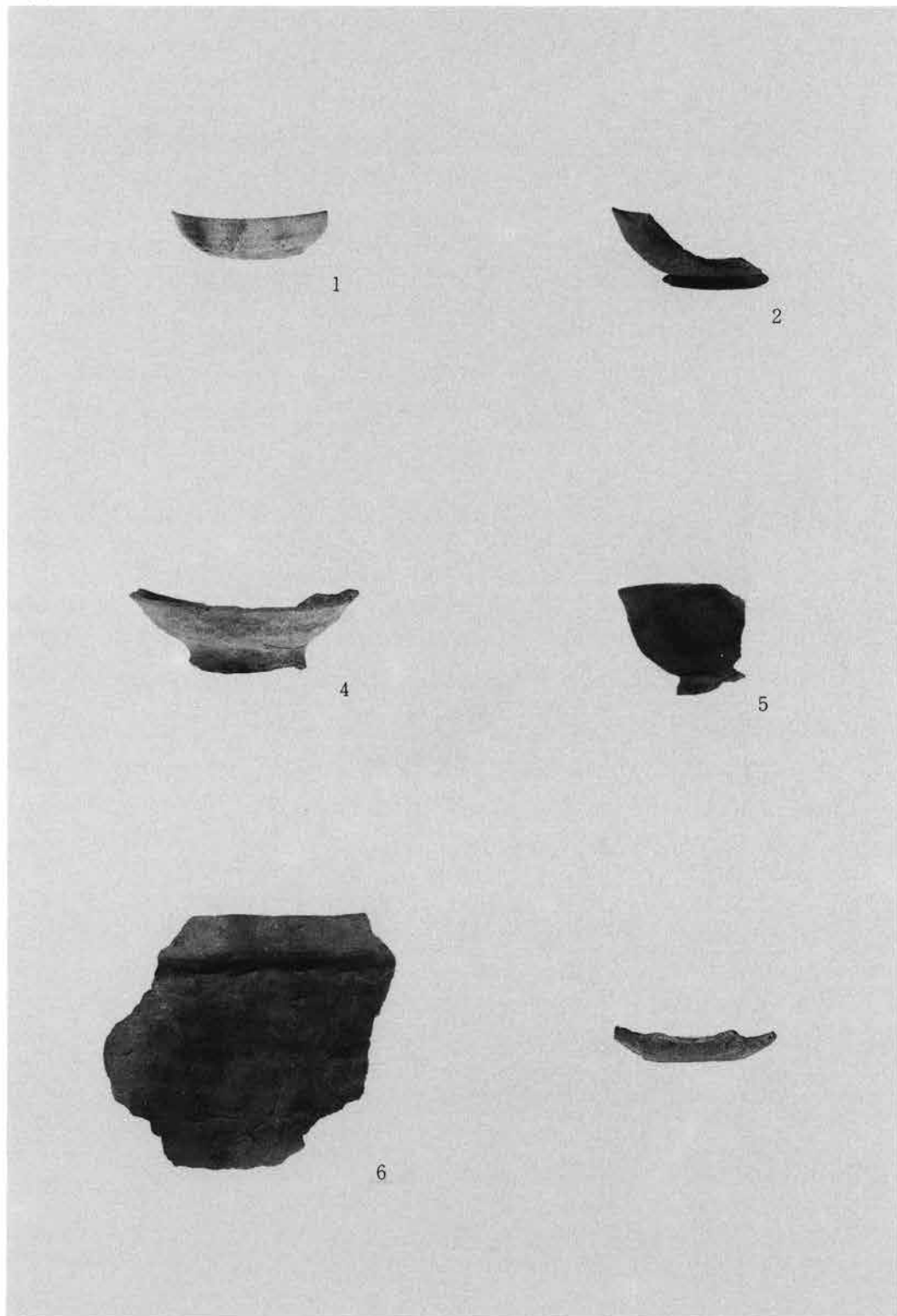
8 4号住居遺物出土状況



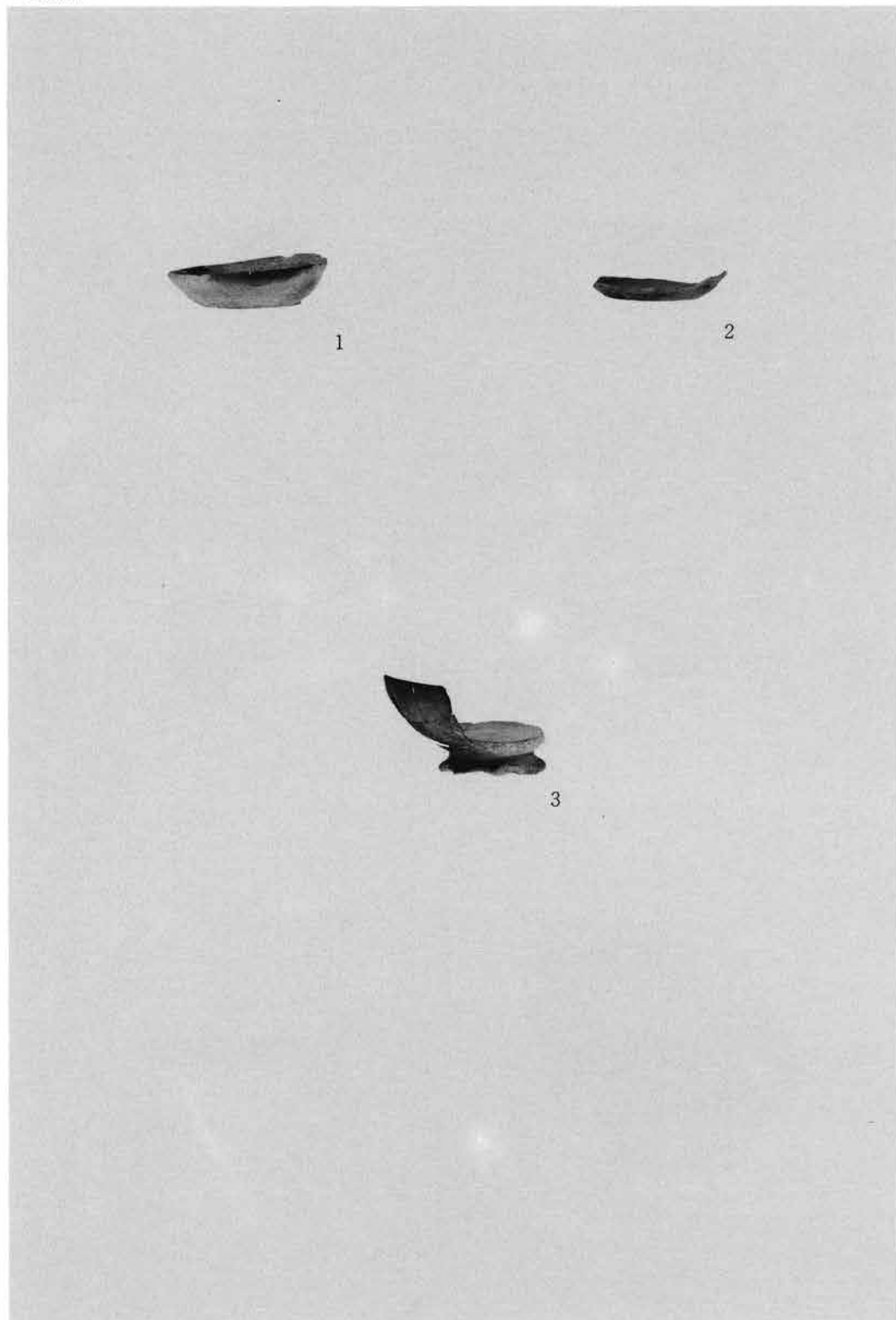
7. 1号住居遺物



8. 2号住居遺物



9. 3号住居遺物



10. 4号住居遺物

三ッ木越戸遺跡

国道354号（境バイパス）地域内
埋蔵文化財発掘調査報告書

発行日 昭和 56 年 3 月

発行所 （財）群馬県埋蔵文化財調査事業団

印刷 朝日印刷工業株式会社
